

『マスコット』

2017年10月16日

佐藤優氏が佐高信氏との「読書術」に関する対談の中で、『マスコット ナチス突撃兵になったユダヤ少年の物語』を「私がここ2~3年で読んだ本のノンフィクションの中でもっともいいと思ったものの一つです」と語っていた。「事實は小説より奇なり」と言うが、こんなことがあるのかと、惹かれて一気に読んだ。

主人公はアレックス・カーゼムというユダヤ人である。彼は5歳の頃、ロシアの支配地ラトビアで、母と弟と妹と暮らし、父は死んだと聞かされていた。ラトビア兵たちはロシアからの解放を期待し、ナチスの意向に従い、協力し、ユダヤ人狩りに熱心であった。背後には、反ユダヤ主義もあったらしい。母は自分たちも殺されると怯えていた。そのような時、アレックスは母と弟妹がラトビア兵に虐殺されるのを見る。彼は森に逃れ、飢えと寒さの中、何か月かを森でさまようが、ラトビア兵に保護される。ユダヤ人の徴である割礼を見られ、性器を隠せと言われ、守り通す。子ども用のナチス突撃兵（SS）のきれいな服を着せられ、幸運を呼ぶ「マスコット」として可愛がられる。兵士たちと行動を共にし、ユダヤ人をシナゴークに投げ込み、焼き殺し、出て来た人を銃殺する状況も目撃する。ユダヤ人を虐殺する兵士たちに保護され、命を保ったのである。アンクルという人に引き取られ、敗戦が迫るドイツを転々とし、連合軍に保護される。戦後は、アンクルの家族と共にオーストラリアに移住し、オーストラリアで家族を持ち、3人の男の子を与えられる。

幼かったので、自分の名前さえ知らず、記憶も定かでない。しかし、子どもの時に受けた恐怖と苦悩はトラウマとして心に深く残った。ユダヤ人虐殺に加担したことに罪を感じてか、ユダヤ人であることを隠し、その意味を問うことを避けていた。一方、自分の過去にこだわり、過去の情報が詰まった資料をトランクに入れ、鍵をかけて、大切に保存していた。人に見せるようなことは決してなかった。ユダヤ人虐殺問題を専門にしている研究者から、5歳の子どもが何ヶ月も森をさまようことなどできないと、虚偽の話だと否定された。彼は、幼い耳に残っていた「コイダノフ」と「パノク」という言葉を覚えていた。この言葉を追いかける形で物語は展開していく。

アレックスは自分の経験を誰にも話さなかったが、50年後、オックスフォード大学博士課程で文化人類学を専攻していた長男のマーク・カーゼムにトランクの資料を見せ、おずおずと話し始める。『マスコット』は、息子マークが父の話の語り手となり、真実を探索するミステリーである。記憶が定かでないので、核心に辿り着けない苛立ちがある。息子は父を信頼し、協力者を得て事実解明に迫っていく。イスラエルの諜報機関はユダヤ人虐殺者を執拗に追いかけて、写真から、彼らを割り出そうと絡んでくる。

協力者から「コイダノフ」はラトビアの地名であるという情報を得る。問い合わせたところ知人がいることが分かった。両親と息子はコイダノフに向かう。そこで、住んでいた家、登って取ったりんごの木を発見する。彼の実名はイリヤ・ガルペリンであることを知らされる。父はパルチザンとして抵抗運動に加わり、ナチスに捕らえられ、強制収容所に送られるが、戦後、故郷に帰り家族を持ったことも判明する。「パノク」は彼と同年の遊び仲間の名前であったことも分かった。更に、「マスコット」として利用されていた時代の軍服姿のフィルムも見つかり、複雑な思いで見入る。全てが確証されたのである。

諸民族が入り混じったヨーロッパ戦争のカオスの中で、人間の優しさと残酷さを体験し、数奇な運命を生き延び、その実態を解明しようとする父子の追及は圧巻である。